

「非政治的人間の考察」から「パリ訪問記」へ

ドイツ語教室 三 枝 圭 作
(昭和49年10月31日受理)

トーマス・マンは論文「文化と社会主義」の中で、第一次世界大戦中に執筆した「非政治的人間の考察」(以下「考察」と略記する)に言及して、

Es ist ein Rückzugsgefecht großer Stils — das letzte und späteste einer deutsch-romantischen Bürgerlichkeit — geliefert im vollen Bewußtsein seiner Aussichtslosigkeit¹⁾

と述べて、「考察」を一種の「退却戦」と呼んでいるが、講演「私の時代」においては、1918年に「考察」の仕事がどうやら完成し、戦争が終結するとともに急速にこの仕事から離反し、やがてその「非政治的な」立場が克服されたという意味のことを述べている²⁾。「考察」が世に出てからほぼ4年後に行なわれた講演「ドイツ共和国について」は、その経緯を示していると思われる。

ところが、多くの評者の中には、マンにこのような思想の変転は存在しないとする立場の論者がいる。彼らは詩人の首尾一貫した Grundüberzeugungen を好意的に強調するか、或いは逆にその点を非難して、「考察」の著者にヒューマンイズムのドイツを擁護し、ドイツ民族に反ファシズムを訴える資格を否定するが、また一方には、フランスの文芸学者 André Gisselbrecht のように、詩人が後年その「公然のまちがい」を完全に克服したことを評価する立場とがある³⁾。いずれにせよ、マンが「考察」における反デモクラティックな君主主義者から、ワイマール共和国の熱心な支持者になったということは事実である以上、この時期のマンに焦点を合わせて、彼の政治的軌跡の模索を試みたい。

1914年1月、トーマス・マンは Isar 河畔の Poschinger Straße 1 番地の新居に移る。それはマンの永住の地になるかに見えた。この時点におけるヨーロッパの大多数の民衆は、ほぼ半世紀にわたる平和のために、ほとんど戦争のことを考えたことがなかった。

Noch ahnte man nicht, wie gut sich Mars und Mammon, Profitgier und Pulverdampf aufeinander reimen.⁴⁾

マンもその一人であった。

ところが、第一次世界大戦が勃発するや、マンはこの全く「予期せざるもの」に驚き、破局を予測し得なかった不明を恥じている。

1) Thomas Mann: Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Aufbau-Verlag Berlin 1956, Band XI, S. 706. 以下同全集からの引用は、ローマ数字で巻数、アラビア数字でページ数を示す。
2) XII, S. 589.
3) Eberhard Hilscher: Thomas Mann. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1973, S. 53.
4) Ebenda, S. 48.

Ich bin noch immer wie im Traum, — und doch muß man sich jetzt wohl schämen, es nicht für möglich gehalten und nicht gesehen zu haben, daß die Katastrophe kommen mußte.⁵⁾

クラウス・マンは1914年の巷の雰囲気を次のように捕捉している。「私の目の前に、はためく旗、珍妙な花束で飾られた灰色のヘルメット、編物をする婦人たち、けばけばしいポスター、それからまた旗の波——それは黒、白、赤の奔流だ——が現れてくる。どこもかしこも大言壮語や愛国家の騒々しいリフレインで一杯だ。」⁶⁾そして、この恍惚状態は決して一般国民だけのものではなかった。例えば、「その創設以来つねにもっとも戦闘的な反政府党であり続けた社会民主党が1914年8月4日帝国議会で戦費の信任に賛成し、政府と城内和平を結んであらゆる階級闘争を中止したばかりか積極的に政府・軍部の戦争遂行に協力することになったことである。……世界最大の社会主義政党として、第2インターナショナルの中核として、ドイツ社会民主党は帝国主義戦争に対しあらゆる機会に反対してきた。つい7月25日オーストリアがセルビアに最後通牒を突きつけた直後にも、党幹部会は宣言を出して、『ドイツ兵士の血の一滴も、オーストリアの権力者や帝国主義的利潤追求者の欲望のために流されてはならない。……われわれは戦争を欲しない！戦争をやめよ！諸国民の国際的友愛万歳！』と絶叫したばかりであった。……理論を軽視し現実を追従することに馴れた彼らの眼にはこの帝国主義戦争も祖国防衛戦とうつつたし、また開戦とともに国民の大部分を襲った激しいショーヴィニズムの熱病にも抵抗し得なかった。』⁷⁾この戦争に血道をあげたのは社会主義者も例外ではなかったのである。

ヘルマン・ヘッセは当時の名だたる知識人たちの迎合的愛国主義を見かねて、O Freunde, nicht diese Töne!と叫んだことは有名だが、その他ハインリヒ・マン、シュテファン・ツヴァイク、レオンハルト・フランクなども、戦争をむしろ冷静に受けとめた少数派に属しているといえよう。

「略伝」によれば、マンは戦争を当初から情熱的に是認して、当時の心境を次のように述べている。

Das Verhängnis nahm seinen Lauf. Ich teilte die Schicksalsergriffenheit eines geistigen Deutschtums, dessen Glaube soviel Wahrheit und Irrtum, Recht und Unrecht umfaßte und so furchtbaren, ins Große gerechnet aber heilsamen, Reife und Wachstum fördernden Belehrungen entgegenging. Ich habe diesen schweren Weg zusammen mit meinem Volk zurückgelegt, die Stufen meines Erlebens waren die des seinen, und so will ich's gutheißen.⁸⁾

しかも、彼はこの壮巖で偉大で実にまともな民族戦争のお蔭で、こういう大事件を身をもって経験することが許されるという幸運に感謝している。⁹⁾ Hans M. Wolf は当時のマンの状況を、

Der „Donnerschlag“ setzte seiner bisherigen Neigung zur Versenkung in die eigene Innerlichkeit ein Ende.¹⁰⁾

5) Thomas Mann: Briefe 1889-1936. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1962, S. 111.

6) クラウス・マン 小栗浩訳「マン家の人々」一転回点1 晶文社 1976年 75ページ

7) 林健太郎編「ドイツ史」山川出版社 昭和35年 247/248ページ

8) XII, S. 412.

9) Thomas Mann: Briefe 1889-1936, S. 112.

10) Hans M. Wolff: Thomas Mann. A. Franke AG. Verlag, Bern 1957, S. 53.

と記しているが、今となっては、マンはこれまで続けてきた芸術的な仕事、つまり「魔の山」を継続することは不可能となった。

Ich war nicht stark oder nicht überheblich genug, mich den Krieg „nichts angehen“ zu lassen; erschüttert, aufgewühlt, gellend herausgefordert, warf ich mich in den Tumult und verteidigte disputierend das Meine. ¹¹⁾

ドイツ国民の苦難は、マン自身の苦難となり、¹²⁾ 彼は国家や国防軍ではなく、時代そのものに「召集」されて、「諸君と共に苦しむ」ために思想的に従軍する。¹³⁾ こうして、マンが一切の創作を投げうって、ドイツのために書き綴った悪戦苦闘の大論文が「考察」であることは言うまでもないが、その由来には以上のような歴史的な背景があったのである。

このような運命の陶酔の中で、マンがとりあえず完成した政治論文「フリードリヒと大同盟」は、「戦争についての論議に寄与する一篇の歴史的評論、すなわちプロイセン王フリードリヒの生涯についてのスケッチ」¹⁴⁾である。それは同時に、戦争とは無関係に考えぬかれた文化論でもあり、永年の研鑽をふまえたものであるが、戦争が勃発し、ドイツのベルギー侵入に対する国際世論の激しい非難に直面して、フリードリヒの史実を借りてドイツを擁護すべく、「即興的」¹⁵⁾に書き上げられたものである。フリードリヒ大王を描くその冷静な心理学的筆致をはじめ、論文は文学的にも高く評価されるべき作品のひとつであろう。しかし、「時局のためのスケッチ」という副題に照らして眺める場合、ここでドイツは擁護されているのか、それとも批判されているのか、妙にさだかではないが、1756年のフリードリヒ大王によるフランス、オーストリア、ロシアの機先を制したザクセン侵攻が、1914年のドイツ軍の国際法を無視したベルギー侵入と暗に並行され、「守勢」と「攻勢」との問題¹⁶⁾が論ぜられるに及んで、マンの意図は明白となる。彼はこれによって、第一次世界大戦に於けるドイツ軍のベルギー侵犯を「歴史的に」正当化しようとしたのである。マンはフリードリヒの行動を「やむを得ない正当防衛」¹⁷⁾、「力をのばしつつあるものの正義」¹⁸⁾だったとする。従って、フリードリヒのザクセン侵入という不法行為は、論文の結末で彼の運命として是認される。

Er war ein Opfer. Er mußte unrecht tun und ein Leben gegen den Gedanken führen, er durfte nicht Philosoph, sondern mußte König sein, damit eines großen Volkes Erdensendung sich erfülle. ¹⁹⁾

つまり、マンの主張するところはこうである。

„daß aber Deutschland mutmaßlich überhaupt nicht bestünde, wenn Friedrich nicht in Sachsen ein-

11) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1956, S. 481.

12) Thomas Mann: Briefe an Paul Amann 1915-1952. Max Schmidt-Rämhold Verlag, Lübeck 1959, S. 54.

13) XI, S. 412.

14) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 67.

15) XI, S. 413.

16) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 179.

17) XI, S. 108.

18) XI, S. 113.

19) XI, S. 126.

gerückt wäre, und daß es heute vielleicht nicht mehr in der Lage wäre, sich seiner unsterblichen Seele zu erfahren, wenn es August 1914 nicht ähnlich gehandelt hätte.²⁰⁾

これに対して、スイスやスウェーデンのような中立的立場の国の人々は、そこに表明されている公正でありたいというマンの意志を称揚したが、国の内外から非難の火の手が上ったのである。この点に関して、マンは「フリードリヒと大同盟」における、ほんのわずかばかりの国粋主義表明によって人々の怒りと軽蔑とをまねいたことを認めているが、²¹⁾ 国外、つまりロマン・ロランからの告発はともかくとして、特に国内からのそれは我慢のならないものであった。彼は言う。

Mehr als befreundet, weniger als Freund... Nicht der Fremde, nicht der „Feinde“ war es, der gegen die Position, in welche die Zeitereignisse mich drängten diese Gefühlshaltung, die zu erklären — nicht zu rechtfertigen, denn das Gefühl ist frei — dies Buch mir dienen muß, die wütendsten Angriffe gerichtet hat. Rolland schalt und klagte mit heftigen Worten, aber er zischte nicht. ... Es war der deutsche Zivilisationsliterat, der mir das Giftigste und Erniedrigendste gesagt hat... War es Gift nun für mich? erniedrigend nur für mich? Es ist seine Sache, darüber nachzudenken, — Sache desjenigen, durch dessen lateinisch beredten Mund der Zivilisationsliterat zu mir sprach. Anzugeben, welchen Mund das war, lehne ich ab.²²⁾

はっきりと名前をあげることを差し控えたとはいえ、ここまでマンを激昂させた相手は、外でもない彼の兄ハインリヒ・マンであった。

もともと、ハインリヒと弟トーマスは、かつてはともにイタリアに遊び互に協力して文学活動を行った仲であったが、二人の関係には1903年頃からはしばしば緊張が起るようになり、兄弟の間に少なからず「かくされた論争」²³⁾が持ち上るようになっていた。そのうちに、両者の疎隔はマンをして、

Mein Bruder, dem die Rheingrenze durchaus willkommen wäre (wir hatten damals eine große Literatur) ist jetzt nicht recht zu brauchen...²⁴⁾

と嘆かせるほどにその度を増すが、戦争の2年目になって、反戦の文芸雑誌「白帖」にハインリヒの暗に弟を批判した Zola-Essay が掲載されてからは、兄弟の関係は決定的なものになった。マンは「考察」の中で、ハインリヒの問題のエッセイ、つまり Bekenntnisschrift に対して総力をあげてアンチテーゼを展開する。そして、その中の特に「文明の文士」と「正義と真理に抗して」の章において、兄に対する最も激しい論難を加えるのであるが、マンとハインリヒの「兄弟喧嘩」の詳細を跡付けることは本論の課題ではない。

こうして、「考察」はマンの個人感情も加わって、「なりふりかまわず」²⁵⁾ 膨張する。論戦は複雑多

20) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 171.

21) Thomas Maun: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 179.

22) Ebenda, S. 179/180.

23) Eberhard Hilscher: Thomas Mann, S. 50.

24) Bürgin-Mayer: Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1965, S. 42.

25) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 272.

岐にわたり、政治論に加えて芸術論がいく重にも混入する。従って「考察」が単なる政治論ではなくなるのは勿論、「芸術作品」でもなくなってしまった。しかし、「芸術家の作品」であることは事実で、²⁶⁾ それ故、マン自身「考察」について次のように述べている。

Das Buch war im Innersten weit mehr Experimental-und Bildungsroman als politisches Manifest.²⁷⁾
この点に関しては次のような適切な論及もある。

Trotz der reaktionären Grundhaltung der „Betrachtungen eines Unpolitischen“ konnte Thomas Mann später in einem kleinen Paradoxon mit Recht sagen, sie seien überall dort, „Wo sie nicht politisch sind, ... durchaus lesbar“, und sie enthielten wohl überhaupt „einige ganz gute, bewahrenswerte Dinge, kulturkritische und autobiographische, auch rein literarische.“²⁸⁾

たとえば、「美德について」の章で、Pfitzner の傑作 „Palestrina“ について論じられている箇所は、本書の最もすぐれた部分のひとつであろう。Inge Diersen も、この書の中心は直接政治問題であるというよりは、kunsttheoretische Fragen, つまり, die Funktion der Kunst であるという意味のことを述べているが、²⁹⁾ 本論の性質上ここではマンの芸術論は割愛しなければならない。

それにしても、「考察」はその膨大な内容を如何なる面からもひとつかみに把握することが不可能なほど複雑多岐であるが、そこに提出されているいくつかのアンチテーゼは、結局はマンの胸の中での「二つの魂」としてとらえられているといえよう。Hans Eichner はそれらを政治の面から次のように要約している。

Im Politischen wie ganz allgemein war das Grundprinzip seiner Denkweise die Gegenüberstellung von unversöhnlich feindlichen Gedankenkomplexen gewesen. Der eine Komplex in Manns frühem politischen Weltbild gruppiert sich um eine geforderte Idee des Deutschtums und lautet „Kultur, Seele, Freiheit, Kunst“; sein Fortbestehen wird gewährleistet vom Obrigkeitsstaat, der es dem Staatsbürger ermöglichen sollte, sich ausschließlich seiner persönlichen Bildungswelt zu widmen und alles Gesellschaftlich-Politische getrost den Berufspolitikern zu überlassen. Der andere Komplex heißt „Zivilisation, Gesellschaft, Stimmrecht, Literatur“, die ihm gemäße Staatsform ist die Demokratie und seine geistige Heimstätte vornehmlich Frankreich. Und Manns Patriotismus, zusammen mit den Grauen vor der zunehmenden Politisierung Europas, führte ihn zur Zeit des ersten Weltkriegs dazu, sich kompromißlos, wenn auch mit wachsenden Zweifeln, auf die Seite des Obrigkeitsstaates zu schlagen.³⁰⁾

マンが3年近い歳月を費し、一切の創作を投げうって書き綴ったこの書は、また挑発的な文句にも事欠かない。例えば、彼は「君主政体」を欲するとか、或いは「権力国家」がドイツ民族にふさわしい当然の国家形態であると断言している。³¹⁾ 要するに、彼がここで擁護したものは、ロマンチ

26) XI, S. 705.

27) XII, S. 589.

28) Eberhard Hilscher: Thomas Mann, S. 51.

29) Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann. Rütten & Loening, Berlin 1959, S. 130.

30) Hans Eichner: Thomas Mann, Eine Einführung in sein Werk, Franke Verlag, Bern 1953, S. 66/67.

31) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 22.

ックな *Bürgerlichkeit*, プロシャ的 *Haltungsethos* 及び極めて反動的な *Kathechismus* であった。³²⁾ 当時のトーマス・マンにとって政治とデモクラシーとはイコールであったが、そのいずれもドイツ民族の本質とは無関係であるということを強調したのである。しかし、それによって、彼自身は深い矛盾に陥らざるを得なかった。

後年、マンは「考察」の仕事がいかにかしいものであったかということをししばしば強調しているが、この苦悩の姿を再びクラウス・マンに聞いてみよう。「父が書斎から出てくる。グレー地の制服じみた上着をびっちり身につけて、ひどく体をそらしている。唇はまるで暗い秘密の上に封をでもしたようにとじられ、目は思いにふけるようにうちにむけられている。父は疲れているらしい。机を前にしての午前の仕事は非常に骨が折れたにちがいない。毎日午前は九時から昼食まで書斎にしばりつけられる……しかし彼はこのたびは明らかに、格別厄介な、求めるところの多い魔法をあみ出そうとしている。今、朝の時間に彼を苦しめているのは美しい物語のひとつではなく、ある抽象的で困難な神秘的なものなのだ。訪客に新しい作品の模様を聞かれると、彼はちょっと当惑顔をする。『つまり本を書いているんだが』と彼は言うが、視線が奇妙に定まらない。『いや、小説じゃないんです。戦争というものを考えているわけです。』まるで父は書斎で新兵器か未曾有の戦略をあみ出そうとでもしているような調子だった。」³³⁾

このような長期の思想作業によって傷ついたマンは、「考察」が完成し、大戦が終結すると、以後一切の政治的な発言を放棄したかに見える。「彼はまたしても非政治的になった。その頃わが家で政治のことが話題になったことはない。……しかし、会話は大抵文化的な問題をめぐってなされていたように思われる。」³⁴⁾ この時期にマンの生涯で最も牧歌的な瞬間がおとずれる。愛犬パウシャンと一緒に散歩に出かけるのは、苦しい時代の慰めであり、気ばらしであった。こうして生れたのが「主人と犬」である。「筋なんかなくてもよい。パウシャンの性格を描こうとすれば正確さと朗かな綿密さ以外には何もいらぬ。イーザル河畔の風景がすてきな背景になる。それは取り立ててどうというわけでもないが絵のように美しい。パウシャンをつれて楽しい散策を試みたいろんな小道を思い出しながら、紙の上でもう一度それをたどってみるのは愉快なことだろう。書きながら自分で楽しい思いをすれば、書かれたものだって退屈なものにはなるまい。実際、『主人と犬』という物語は、緊張した筋などなくても好ましい読み物だ。」³⁵⁾ 「主人と犬」は、あまりにも政治的な「非政治的人間の考察」に対して、真の意味で非政治的な作品である。これは、同じ頃に生れた「幼な児の歌」と共に、世界大戦の勃発以来祖国に対する義務感から中断していた平和な仕事（創作）への復帰を意味している。それから数年、彼が時局について口を開くことはほとんどなかった。しかし、この間、彼は国粹的な「考察」の著者として、右翼の思想家 Arthur Moeller van den Bruck との関係が取り沙汰されるが、この点に関してはまたしてもクラウス・マンの登場を求めなければならぬ

32) Eberhard Hilscher: Thomas Mann, S. 50.

33) クラウス・マン「マン家の人々」一転回点 1 88/89ページ

34) クラウス・マン「マン家の人々」一転回点 1 130/131ページ

35) クラウス・マン「マン家の人々」一転回点 1 129ページ

い。「『考察』の著者は反動の一味の指導者にも寵児にも容易になり得ただろう。しかしこの連中から示されたお世辞たらたらな申し出を、彼は静かに鄭重に拒否した。彼とドイツ国粋主義者との類縁関係は、もしそれがあつたとしても一時的なものであり、また一部誤りにもとづいていた。ドイツの伝統を重視する気分においても、彼は攻撃的な盲目的愛国心の粗暴と感傷性とはなんの共通点ももたなかった。」³⁶⁾

ところが、トーマス・マンは1922年10月15日に、4年間の沈黙を破ってベルリンのベートーヴェン・ホールで行われた講演「ドイツ共和国について」においてデモクラシーを讃えて「共和国ばんざい!」を叫び、「ドイツ精神」の擁護者の登場を期待していた聴衆を啞然とさせる。彼の意図するところは、彼らを必要なかぎり共和国の味方に引き入れ、デモクラシーと名づけられているもの、ヒューマニティと呼ばれているものの味方に引き入れることであつた。そして、好戦的ナショナリズムに反対を表明する。

Und um das Nationale nicht völlig in Verruf kommen, es nicht gänzlich zum Fluche werden zu lassen, wird nötig sein, daß es, statt als Inbegriff alles Kriegsgeistes und Geräufes, vielmehr, seiner künstlerischen und fast schwärmerischen Natur durchaus entsprechend, immer unbedingter als Gegenstand eines Friedenskultus verstanden werde... Die Welt, die Völker sind alt und klug heute, die episch-heroische Lebensstufe liegt für jedes von ihnen weit dahinten, der Versuch, auf sie zurückzutreten, bedeutet wüste Auflehnung gegen das Gesetz der Zeit...³⁷⁾

彼は特にノヴァーリスを引き合いに出して、

humaitas als Idee, Gefühl und sittlich-geistiges Regulativ, das stille Bewußtsein, daß Staat nur „eine besondere Verbindung mehrerer Menschen in dem großen Staate ist, den die Menschheit für sich selbst schon ausmacht“³⁸⁾

を挙げ、最後にドイツの政治に「ドイツ的中庸」としてのヒューマニティを求めて講演を終る。

Zwischen ästhetischer Vereinzelung und würdelosem Untergange des Individuums im Allgemeinen; zwischen todverbundener Verneinung des Ethischen, Bürgerlichen, des Wertes und einer nichts als wasserklar-ethischen Vernunftphilisterei ist sie in Wahrheit die deutsche Mitte, das Schön-Menschliche, wovon unsere Besten träumten.³⁹⁾

「考察」の「非開化主義者」による西欧デモクラシーの擁護。聴衆の靴で床をこすって憤慨するのは当然であつた。ドイツ共和国へのこの信仰告白が彼らの眼に「変節」,「豹変」あるいは「断絶」と映るのも無理はない。国粋主義的新聞は、激烈な嘲りをこめて、**Mann üler Bord!**と報じたという。彼は「転向」したのだろうか。そしてドイツ精神とドイツ文化とを裏切つたのだろうか。更に

36) クラウス・マン「マン家の人々」— 転回点1 130ページ

37) XII, S. 495/496.

38) XII, S. 494.

39) XII, S. 532.

マンの言葉に耳を傾けてみよう。

彼は今やドイツ人にとって「内的事実」となった共和国を「運命愛」として受容することを訴える。

Die Republik, die Demokratie sind heute solche inneren Tatsachen, sind es für uns alle, jeden einzelnen, und sie leugnen heißt lügen... Das Schicksal hat sie — wir wollen nicht triumphierend rufen: „hinweggefegt“, wir wollen sachlich aussprechen: es hat sie beseitigt, sie sind nicht mehr über uns, werden es, nach allem, was geschehen, auch nie wieder sein, und der Staat, ob wir wollten oder nicht, — er ist uns zugefallen. In unsere Hände ist er gelegt, in die jedes einzelnen; er ist unsere Sache geworden, die wir gut zu machen haben, und das eben ist die Republik, — etwas anderes ist sie nicht. Die Republik ist ein Schicksal, und zwar eines zu dem „amor fati“ das einzig richtige Verhalten ist.⁴⁰⁾

そして、共和国、或いはデモクラシーに対する反発はただ言葉を恐れているに過ぎない。共和国がやはりドイツであるように、デモクラシーも軍力をがちゃつかせるかの帝国よりも居心地が悪いとは言えない。更には「マイスタージンガー」をドイツ・デモクラシーの範例として提出する。つまり、彼はドイツ・ロマン主義の中にももともとデモクラシーの要素が含まれていたということ、従ってドイツ・ロマン主義の世界は、この新しい世界につながっていたということを特にノヴァーリスやホイットマンを引用して説得を行なう。講演の結末近く、彼は生に対する関心と死に対するそれとの関係を提出し、死を賛美するロマン主義を生への賛歌としてのロマン主義に結びつける。

Und ist Sympathie mit dem Tode nicht lasterhafte Romantik nur dann, wenn der Tod als selbständige geistige Macht dem Leben entgegengestellt wird, statt heiligend-geheiligt darin aufgenommen zu werden? Das Interesse für Tod und Krankheit, für das Pathologische, den Verfall ist nur eine Art von Ausdruck für das Interesse am Leben, am Menschen, wie die humanische Fakultät der Medizin beweist; wer sich für das Organische, das Leben, interessiert, der interessiert sich namentlich für den Tod.⁴¹⁾

以上、マンは過去の非を告白したり、不本意ながら「転向」を表明しているのではない。彼は自己の精神の基底部において政治的過去と何ら「断絶」がないと主張している。講演が単行本として刊行されるに際して新たに添えられた「序」の中で、彼は志操の変化などというものは知らないし、ことによると考えを変えたかもしれないが、志操を変えたことはなく……ここで共和国に対して励ましを与えているのは、「考察」の進路の正確な、今日にいたるまで断続のない継続であって、あの書の志操、すなわちドイツの人間性の志操は否定されていない、という意味のことを述べている。講演の中では、更にはっきりと言う。

40) XII, S: 501.

41) XII, S. 531.

Ich widerrufe nichts. Ich nehme nichts Wesentliches zurück. Ich gab meine Wahrheit und gebe sie heute. 42)

またそのすぐ後で、彼は自らを「保守主義者」とさえ呼んでくりかえし「断絶」を否定しているし、後年の講演「私の時代」においても、この興奮の日々を回想して、きっぱりと同じ主旨のことを述べている。

Bloße vier Jahre nach dem Erscheinen der „Betrachtungen“ fand ich mich als Verteidiger der demokratischen Republik, dieses schwachen Geschöpfes der Niederlage, und als Anti-Nationalist, ohne daß ich irgendeines Bruches in meiner Existenz gewahr geworden wäre, ohne das leisteste Gefühl, daß ich irgend etwas abzuschwören gehabt hätte. 43)

いっぽう、以上のようなマンの主張と平行して、やはりマンの思想の経過に「断絶」を承認しない評者がいる。例えば Flinker は講演「ドイツ共和国について」をはじめ、その後の一切のマンの政治的著作の基調に「考察」の存在を確認し、彼の政治思想の一貫性を主張する。Hans Eichner は「ドイツ共和国について」に言及して、

Mann hat sich schon weit genug mit dem Neuen abgefunden, um gegen die Alternative chauvinistischen Terrors für die Demokratie Stellung zu nehmen. 44)

と述べてマンのデモクラシーへの転向を指摘するとともに、その証左としてすでに本論の註 18) でも引用した記述を提示しているが、Flinker は逆にこれらの言葉はすでに「考察」で展開されたものに外ならないと断定している。

また、1930年のマンの講演「理性に訴える」の中にはこんな一節がある。

Es kommen tiefe, wenn auch unbestimmte und ratlose Zweifel innerpolitischer Art hinzu, Zweifel also daran, ob die im westeuropäischen Stil parlamentarische Verfassung, die Deutschland nach dem Zusammenbruch des feudalen Systems als das gewissermaßen historisch Bereitliegende übernahm, seinem Wesen vollständig angemessen ist, ob sie seine politische Sittlichkeit nicht in gewissem Grade und Sinne entstellt und schädigt. 45)

Flinker はこのような西ヨーロッパ型の議会制度への疑念の表白こそ、マンの「考察」の基調音だったのだと論じている。以上のように、Flinker はマンの「考察」からの離脱を否定しながら、更に「考察」本来の進歩性を強調している。

Er war immer nur dem Fortschrittlichen und Neuen, der Jugend, der Zukunft aufgetan. Seine Gedanken gelten — vom Tage da er zu schreiben begann — immer nur der Humanität. 46)

42) XII, S. 508.

43) XII, S. 589.

44) Hans Eichner: Thomas Mann, S. 68.

45) XII, S. 539.

46) Martin Flinker: Thomas Manns politische Betrachtungen im Lichte der heutigen Zeit. 's-Gravenhage 1959, S. 96.

従って、トーマス・マンが「ドイツ共和国について」において、君主制に敵対するドイツ共和国の擁護者として登場したとき、彼は「政治的に望ましいもの」についての彼の判断が変わってしまったと非難を浴びたが、Flinker はマンの「変えられた判断」とは 政治的に「望ましいもの」ではなく、恐らく政治的に到達し得るものが引き合いに出されたものとして捕えている。しかも、ドイツ人の本質にふさわしい国家組織として「考察」で示された像は、敗戦後4年のこの講演の時点においては *unwirklich, unrealisierbar, unerreichbar* であったと彼は言う。君主制は崩壊し、皇帝は亡命した。ドイツはマンの意に反して西欧的民主主義共和国となったが、早くも共和国にはファシズムによる危険が迫りつつあった。彼によればマンは祖国と文化とに対するその危険を認めた最初の人のひとりであった。

Obskurantismus, mit seinem politischen Namen Reaktion geheißten, ist Roheit, — sentimentale Roheit, insofern sie, sich selbst betrügend, ihre brutale und unvernünftige Physiognomie „unter der imposanten Maske“ des Gemütes, der Germanentreue etwa, zu verstecken sucht... Wenn sentimentaler Obskurantismus sich zum Terror organisiert und das Land durch ekelhafte und hirnverbrannte Mordtaten schädigt, dann ist der Eintritt solchen Notfalls nicht länger zu leugnen. 47)

このように、「国家社会主義」の「権力獲得」の11年も前に恐怖政治の出現を警告したマンを Flinker は高く評価する。更に彼の説に耳を傾けよう。それによれば、新共和国は発足したが、そのデモクラシーによる新憲法が未だ国民的共感を得ているとはいえない状況を見るにつけ、マンはこのことを恐れ、警告したのであった。彼は今、このような危い祖国を支持する以外に何もできなかった。彼は総力をあげて、若者を共和国の味方につけようとする。共和国は敗北と虚脱の上に建てられたものではなく、自由な意志と国民的高揚の表現であると。そして、*Aber nun haben wir sie!* と叫んだのだ。

しかるに、マンの論調は何か *fest* なものに欠け、あきらめの響きがある。デモクラシーの擁護者として自信に満ちていると言いがたい。Flinker はその理由を次のように論述する。

Denn seine Überzeugung, daß das deutsche Volk noch lange nicht reif sei für die Demokratie überhaupt und schon gar nicht geschaffen für die Demokratie nach westlichen Muster ist geblieben. 48)

マンは西欧的デモクラシーの信仰告白をしたのではなかった。むしろ逆だったのである。Flinker はその証左に、マンの論文「文化と社会主義」の一節を引用している。

Glaubt man auch nur mir entgegen, daß dieses Buch.... (die Betrachtungen) weit mehr taugt und wiegt als jene väterliche Ermunterung zur Republik, mit der sein Verfasser ein paar Jahre danach eine störrige Jugend überraschte.... 49)

また、Erika Mann の「考察」の復元版の「序」には次のような記述が見られる。

47) XII, S. 498.

48) Martin Flinker : Thomas Manns politische Betrachtungen im Lichte der heutigen Zeit, S. 100.

49) XI, S. 705.

T. M.s großer Essay „Von Deutscher Republik“, sein plötzliches Bekenntnis zu dieser in der Stunde ihrer Not, und als „Schritt“ sein inopportunster seit den „Betrachtungen“, erschien um diese Zeit und wirkte, als hätte der Autor sich eine Brandbombe ins eigene Haus geworfen. Selbst die „Kunst-schrift“ hatte meinem Vater so viel Schimpf nicht eingebracht.⁵⁰⁾

いずれにせよ、マンは、共和国が脅かされる存在となった時点で、やむなくドイツ共和国の支持を宣言したのである。ところが、この文字通り「政治的講演」には彼の確信からほとぼしる力強い響きを感じられない。彼の初期の信仰の公然たる「否認」であるにもかかわらず、「考察」の余韻が依然として尾を引いている。講演の中でマンが引用するノヴェーリスの言葉がこのことを端的に示している。

Diejenigen, die in unseren Tagen gegen Fürsten als solche deklamieren und nirgends Heil statuieren als in der neuen französischen Manier... das sind armselige Philister, leer an Geist und arm am Herzen... Buchstäbler, die ihre Seichtigkeit und innere Blöße hinter den bunten Fahnen der triumphierenden Mode zu verstecken suchen.⁵¹⁾

それでは、マンがここで主張したかったのは、何だったのか。それは「ヒューマニズム」だったのではなからうか。彼は講演「私の時代」の中で、当時の思想的「断絶」をきっぱりと否定したあとで、次のように言う。

Gerade der Antihumanismus der Zeit machte mir klar, daß ich nie etwas getan hatte — oder doch hatte tun wollen —, als die Humanität zu verteidigen.⁵²⁾

つまり、彼は「ドイツ共和国について」から30年後の時点においても、「ヒューマニズム」を守るとは言っているが、共和国とは言っていないのである。1934年3月の日記には次のような記述が見られる。

Mein Werk hat mit Deutschland etwas zu tun und mit Europa etwas zu tun, aber gar nichts mit der Republik. Aber verdimmt von Politik weil zu dumm für die Politik, halt man kein Werk fur bedingt durch die Republik und ihr „saisonmäßig“ zugehörig...⁵³⁾

以上、Flinker は詩人の政治思想がつねに直線的に進展してきたことを論じていたのであって、マンの転向を認めるルカーチ、或いはマンが1918年以後デモクラシーの陣営に立ち、1924年の長篇「魔の山」の出現の時点で政治の庭に降り立つ決心をしたとする Rychner の立場とも異っているものである。

「略伝」によれば、トーマス・マンは戦争の初頭から「顕著な画期的な転換」の到来を意識していたが、「考察」執筆中に早くも「退却戦」を予感していたということはすでに冒頭で述べた。そこ

50) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. XVI.

51) XII, S. 497/498.

52) XII, S. 589.

53) Martin Flinker: Thomas Manns politische Betrachtungen im Lichte der heutigen Zeit, S. 103.

で讃美される価値はやがて歴史によって断罪されるであろう、見込みのないことは百も承知の戦いだったのである。

Daß der Krieg aber für Deutschland einen mächtigen Schritt vorwärts auf dem Wege zur Demokratie vor allen Dingen bedeuten werde, das wußte ich am Tage seines Ausbruchs.⁵⁴⁾

マンは上に続けて、自分が反抗しているのは、きたるべきデモクラシーに対してではなく、ただそれが馬鹿げた形態ではなく、いささかなりともドイツ的形態をとって実現してほしいと願っているにすぎないと述べている。ここには、すでにデモクラシーへの関心と関与の姿勢が現れているといえないだろうか。彼は、早くも自分もドイツも変りつつある。いや、変らざるを得ないということを感じていたのである。こうして彼は戦争の終結とほとんど時を同じくして「考察」から離脱していくが、その後、「沈黙の4年間」がやってくる。そして、彼のデモクラシーへの接近が開始されるのである。マンは「考察」においてデモクラシーの墮落を兄ハインリヒより鋭く認識するとともに、その概念を立憲的な意味においてではなく、「精神形式、進歩のラジカリズム」として理解していたのであったが、この「沈黙の4年間」にかけて彼の擁護したヒューマニズムの政治的別名がデモクラシーであることを感じはじめたのではなからうか。

彼は次第に政治的に考えを変えつつあった。

Natürlich bedeutete das kein Tabula-rasa-Machen, keine entschiedene Absage an seine bisherigen Bildungsmächte oder die Verleugnung der bürgerlichen Tradition, aber umdenken lernte er allmählich im Politischen.⁵⁵⁾

このことは勿論今までの態度の全面撤回ではなかったが、極めてゆるやかに何かが始まっていた。彼は C. B. Boutel 宛ての手紙の中で述べている。

In politischer Beziehung dagegen ist bei mir (und das ist vielleicht national-deutsch) ein sehr langsames Reifen festzustellen.⁵⁶⁾

ところで、トーマス・マンの一連の「文化政治的エッセイ」は、ほぼ1920年頃に執筆され始めたのを見れば、彼が上の引用のすぐ後に

und tatsächlich setzte erst der mich in meinen Grundfesten erschütternde Kriegsausbruch von 1914 mich gewaltsam zu Problemen überhaupt in Beziehung, für die ich vorher gar kein Organ entwickelt hatte.⁵⁷⁾

と続けて、彼の政治的成熟が大戦勃発に触発されたものだとしているのは、文字通り受け取ってよからう。しかし、戦前の彼の諸論文に政治的要素が全く発見されないわけではない。すでに触れた Flinker は、マンの戦前の論文「演劇試論」、「老フォンターネ」、或いは「『大公殿下』について」などの一節をその例としてあげている。例えば「『大公殿下』について」の中にはデモクラシーに関し

54) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 322.

55) Eberhard Hilscher: Thomas Mann, S. 53/54.

56) Thomas Mann: Briefe 1937-1947, S. 352.

57) Ebenda, S. 352.

て次のような記述が見られる。

In dem Schicksal meiner drei fürstlichen Geschwister, Albrecht, Klaus Heinrichs und Ditlindens, malt sich symbolisch die Krise des Individualismus, in der wir stehen, jene geistige Wendung zum Demokratischen, zur Gemeinsamkeit, zum Anschluß, zur Liebe, … 58)

彼はこれらを取り上げて、マンが戦前非政治的ないしは反政治的であったとする多くの評者に対して、戦前戦後を通じて終始政治的だったと論じているのである。しかしながら、何といっても初期のマンの諸論文の色調は、自伝的な報告、批評そして芸術論であり、政治的問題に対しては外部から刺激された場合のみ、極めて稀にその態度を表明したのであって、上述の諸論文も厳密には文学的領域を越えるものではないとする Hilscher の説の方が、マンの戦前の姿勢を的確に捕えているのではなかろうか。

さて、第一次大戦後、マンは過激な左翼革命運動と、それに対抗する暴力的な右翼団体の闘争を政治的に見守ることになる。1920年のカップー揆、そして特にその2年後に起った帝政派将校による外務大臣 Walther Rathenau の暗殺事件は、マンがドイツ共和国支持を公然と表明する直接のきっかけになったと言われている。Rathenauの締結したラッパロ条約は、「ドイツが連合国とソ連との基本的な対立を利用することによって連合国をけん制し、ヴェルサイユ条約の緩和をはかろうとしたもので、ドイツが外交上の自主性を回復しようとする試みのひとつ」⁵⁹⁾つまり端的には、ソヴェート・ロシアとの国交回復であるが、この画期的な条約に対する過激な反動は、マンの民主主義への接近を促進したといえよう。しかし、この暗殺事件だけがマンの「転向」声明といわれる「ドイツ共和国について」を実現させたのでもないであろう。すでに、ドイツの社会民主主義を標榜する政党はワイマール共和国の実践に際して、市民的民主主義的目標を追求していたが、その姿勢は革命的ではなかった。トーマス・マンはそのようなデモクラシーからはもはや市民的芸術家気質に対する危険を感じなかったに違いない。彼はむしろ、それを受容し、擁護し、更には強化する必要を痛感しはじめていたのではなかろうか。デモクラシーに組することが、ヒューマニズムの擁護につながることに彼は気がついたのであろう。

こうして、マンは講演「ドイツ共和国について」において、ヒューマニズムの擁護、つまりデモクラシーへの愛を告白することになる。しかし、彼は唐突に進歩主義の立場に立ってそれを行なったのではなかった。マンとしては、「後向きの結びつき」⁶⁰⁾即ち、ドイツ人の魂の故郷であるロマン主義の世界を、デモクラシーの可能性を探し求めるよりどころとするほかなかったのである。「デモクラシーに対する『ドイツロマン主義の擁護』から、ドイツ・ロマン主義による『デモクラシーの弁証へ』へ」⁶¹⁾この大胆な「デモクラシーの弁証」は、マンの過去からの苦渋に満ちた「変容」を示すものであっても、思想の「断絶」を反映するものではないはずである。

58) XII, S. 361/362.

59) 林健太郎編「ドイツ史」273ページ

60) Eberhard Hilscher: Thomas Mann, S. 56.

61) 脇圭平 知識人と政治 岩波新書 1973年 130ページ

マンはこの講演の結末近くで言う。

Keine Metamorphose des Geistes ist uns besser vertraut als die, an deren Anfang die Sympathie mit dem Tode, an deren Ende der Entschluß zum Lebensdienste steht.⁶²⁾

このことは、マンも指摘するように、この講演が生への親近を表白したものであり、「考察」はこれに先立って歌われた「死との共感」であるということを示しているが、両者はともに著者の本性を構成する一要素なのである。ルカーチによれば、「戦時中マンが非ドイツ的なものとして非難していたデモクラシーの意義を、ドイツ性の再生のために深く把握しただけでもなかった。かれは、デカダンのイデオロギーおよびデカダンの感情のあり方と、それまでの発展との間の関係にも目をひらいたのである。デモクラシーを求める闘いは、かれの場合、いまやデカダンスに対する闘いに変わっていく。ここには戦時中に書かれたあの著書が爽り豊かな矛盾を含みつつ、逆説的に発展を続けていくさまが見られる。あの著書は、戦争を遂行していたドイツもろともに、デカダンスを、病氣と腐敗への、夜と死への共感を擁護している。しかしトーマス・マンが擁護したのは、賛否の入りまじった混沌のなかへあくまでも徹底的に突き進んで行くことであった。その結果、かれはドイツのデカダンスの正当化になじもうとする無理強いな試みのすえに、1918年の出来事に助けられて、正反対の原理のみが正しいものであることを確信するにいたっていたのである。」⁶³⁾この「変容」のテーマを小説として更に大規模に展開したのが長篇「魔の山」であるとする見方は許されると思われるが、そうすれば、例の「沈黙の4年間」に、マンはこの大作に専念していたということが言えないだろうか。

ところで、同じくルカーチは「魔の山」の中で、反動的ファシスト的反民主主義的世界観の代表者であるジュスイットのナフタが、自分の教えを説くときに、ほとんどノヴァーリスの言葉を持って次のように語るとき、トーマス・マンの世界観に、決定的な転回が起きたことがわかると述べている。「病氣はこのうえなく人間的なものである。……というのは、人間であることは病氣であることを意味する。……人間は本質的に病氣である。病氣であることこそが人間を人間にする。人間を健康にし、自然と和睦させ、『自然に還らせ』ようとする連中……つまりあらゆる種類のルソー流の連中が努力していることは、人間の非人間化、動物化にほかならない……。すなわち精神のなかにこそ、人間の尊厳が、人間の高貴さが存するのである。一言にして言えば、人間は病氣であればあるほど、いっそう高い程度において人間的である。病氣の靈は健康の靈よりもいっそう人間的である。」⁶⁴⁾また彼はマンを弁護して言う。「1918年以後のドイツのデモクラシーも、かちとったもの、あるいは闘いとったものではなく、いとわしい運命の — 歓迎されざる — 贈物であった。したがって、真に確固たるものにはなっていない生れたばかりの、デモクラシーには、憤激した敵対者や日和見的に我慢している連中はたくさんいても、味方や支持者はごくわずかしかなかった。

62) VII, S. 531.

63) ルカーチ著作集5 白水社 1969年 422ページ

64) ルカーチ著作集5 白水社 424/425ページ

しかもその味方や支持者でさえ、たいていは、そういう廻りあわせになったのでやむなくデモクラシーを受け入れただけの話で、ドイツの（もちろん見なおされた）過去とデモクラシーとの間に橋をかけ渡して結びつけようなどとは試みもしなかった。要するに、ヴァイマル・デモクラシー体制のなかでトーマス・マンが孤立した立場にあったのは、かれがまさしくこのような橋をかけ渡す方途を求めていたからであり、かれの作家としての教育的作品が、ドイツ性の本質から生まれ育ってくる民主主義というものを目ざしていたからなのである。だからこそ、かれはこの時期にデモクラシーを世界観の問題として、それもドイツの世界観の問題として採りあげた唯一の市民的作家だったのである。」⁶⁵⁾

しかしこのようなルカーチの好意にもかかわらず、やはり講演のためらいがちなまぬるさを批判する論者は多い。Inge Diersen もこの講演の基調にやはり「イロニッシュな留保」のあることを認めているが、それにもかかわらず、この講演がマンの決定的な第一歩であると評価しているのは的を射た指摘と思われる。

Die echten und aus vollster Überzeugung kommenden Bekenntnisse Thomas Manns nun nicht mehr nur zur republikanischen Staatsform, sondern zur Demokratie und schließlich zur sozialen Demokratie sind zu dieser Zeit noch nicht zu finden, sondern erst gegen Ende der zwanziger Jahre. Dennoch hat er hier den ersten entscheidenden Schritt getan, den der Loslösung, der Trennung vom politischen Konservatismus und, eng damit verbunden; den zur aktiven Teilnahme am politischen Tageskampf.⁶⁶⁾

さて、デモクラシーへのマンの接近は、喧嘩別れしていた兄ハインリヒへのそれでもあった。すでに1917年12月、兄の方から「和解の試み」が企てられたこともあったが、両者の関係に戦後も相変わらず距離がおかれていた。1922年の初め、兄の重病を契機に、兄弟の「再会」が実現した。トーマスはハインリヒ宛てに書いている。

Es waren schwere Tage, die hinter uns liegen, aber nun sind wir über den Berg und werden besser gehen, — zusammen, wenn Dir's ums Herz ist, wie mir.⁶⁷⁾

その夏、彼らは一緒にバルチック海への旅に出たのであった。マンのデモクラシーへの接近を示す挿話である。

その頃、マンはヨーロッパ各地を講演旅行して危険な時代の接近を見てとるとともに die Sammlung, Einigkeit, Solidarität der gesitteten Willenskräfte の必要を強調する。⁶⁸⁾それは「インフレーションのためにつのってくる金の心配」⁶⁹⁾がやむなく彼を駆り立てたものであったとしても、彼に混乱の時代を冷静に眺めさせることになった。

「魔の山」完成の翌年、マンは短篇「無秩序と幼い悩み」を発表するが、その主人公の歴史学教

65) ルカーチ著作集 5 423/424ページ

66) Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann, S. 135.

67) Thomas Mann: Briefe 1889-1936, S. 196.

68) XI, S. 357.

69) Bürgin-Mayer: Thomas Mann: Eine Chronik seines Lebens, S. 60.

授には詩人の自画像が見事に投影されている。背景には、第一次大戦後の荒廃した若い世代が暗示的に描かれている。そして前景にはマンの郷愁のように、コルネリウス教授のメランコリックに死を礼賛する姿がイローニッシュな調子で描かれているが、しかしここでも時代の「新しいもの」が肯定されているのである。

Er bewegt bei sich ein paar leise melancholisch gefärbte Sätze, die er morgen vor seinen Studenten sprechen will, über den sachlich aussichtslosen Kampf des langsamen Philipp gegen das Neue, den Gang der Geschichte, die reichersetzenen Kräfte des Individuums und der germanischen Freiheit, über diesen vom Leben verurteilten und also auch von Gott verworfenen Kampf beharrender Vornehmheit gegen die Mächte des Fortschritts und der Umgestaltung.⁷⁰⁾

マンが後年、時代批判と自画像との調和したこの作品を彼の「最良のもの」のひとつに数えているのは意味深い。

クラウス・マンは「マン家の人々」の中で、「父が好きなものはロシアの作家だ」⁷¹⁾と書いているが、トーマス・マンは「考察」で、フランスやイギリスの文学に対してよりもロシアの文学に近しきを感じる旨を述べている。⁷²⁾そしてロシア的人間性とドイツ的人間性との結びつきを期待し、それが政治的にも延長されることを希望している。しかも彼は大战勃発前にロシア旅行を計画していたことも知らされている。やがて1917年にロシアで革命が起きたとき、彼はまだ「考察」の仕事を終えていなかったが、ロシアが「民主主義共和国」に向っていると感じるようになる。

1918年戦争は終結し、マンの沈黙によって彼の思想の経過は不明になるが、わずかにもれ聞える言葉からその微妙な変化をうかがい知ることができる。1919年3月29日 Ponten あての書簡には、共産主義を不安そうに「プロレタリア文化」から区別しながらそこに「多くの善と人間的なもの」を是認している。⁷³⁾

マンの「文化政治的エッセイ」が1920年頃から始まることはすでに述べたが、この頃から彼は自己の生活の「批判的監視」⁷⁴⁾いわば彼の創作の重要な「付属物」⁷⁵⁾としての評論を積極的に発表する。ということは、従来無関係であったころの政治が、彼の内部に影を落すことになる。彼はつねに時代と対決する姿勢をとるようになった。1921年に行なわれた講演「ゲーテとトルストイ」は、「ヒューマニズムの問題への断章」という副題の下に、今後のマンの姿勢を暗示するとともに、反ファシズムの警告を散見させる。こうして彼の時代への発言は数を増してくるが、彼は主として啓蒙の理念から、非開化論及びファシズムとの闘いを展開する。

70) IX, S. 685.

71) クラウス・マン「マン家の人々」— 転回点1 119ページ

72) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 429 ff.

73) Thomas Mann: Briefe 1889-1936, S. 158.

74) XII, S. 416.

75) Ebenda, S. 416.

Ich liebe das, was ich die sittliche Oberwelt nannte, ich liebe das menschliche Gedicht, den klaren und humanen Gedanken. Ich verabscheue die Hirnverrenkung und den geistigen Pfuhl.⁷⁶⁾

以上は1923年の講演「神秘的体験」の中の一部であるが、マンは同じ意味の言葉を長篇「魔の山」の中でゼッテムブリーニに語らせている。ところがこのようなイベリア半島の Terror-Faschismus とは別に、マンにはロシアの新しい姿、つまり Terrorbolschewismus が目立ち始める。彼は理解不十分とはいえ、最初革命ロシアに共感を抱いていたのだが、早くも1920年、かの地における最近の極めて不毛なラジカリズムをロシア的全体主義と呼んだ。やがて彼はこのヴォルシェヴィズム革命にロシアの「ヨーロッパ時代」の終焉を見て取る。すでに触れた講演「ゲーテとトルストイ」の中で彼は言う。

Aller westlich-marxistische Einschlag, den die große Umwälzung im Lande Tolstojs an den Tag legt — an jenen Tag, der die Oberfläche der Dinge bescheint —, hindert uns nicht, in der bolschewistischen Umwälzung das Ende der Epoche Peters, der westlich-liberalisierenden, der europäischen Epocne Rußlands zu sehen, welches mit dieser Revolution sein Angesicht wieder nach Osten wendet.⁷⁸⁾

更に、先にもあげた「パリ訪問記」の中の次のような箇所を見れば彼は Kommunismus の側にも軍国主義の色彩を認めていることがわかる。

Man „trägt“ wieder Militarismus heute, sei er nun faschistisch oder kommunistisch eingefärbt.⁷⁹⁾ 後年彼は、講演「芸術家と社会」において自分が Communist になるのははなはだ不適格で、彼の形式主義、心理主義、デカダンス等は、まさに Kommunismus の側からも歓迎されないであろうという意味のことを述懐しているが、しかしながら彼は当時すでに Kommunismus と Faschismus とのあいだにひとつの区別をもうけていたらしいことは次の言葉から推測される。

Der Kommunismus ist eine Idee, deren Wurzeln tiefer reichen als Marxismus und Stalinismus und deren reine Verwirklichung sich der Menschheit immer wieder als Forderung und Aufgabe stellen wird. Der Faschismus aber ist überhaupt keine Idee, sondern eine Schlechtigkeit, der hoffentlich kein Volk, klein oder groß, sich je wieder ergeben wird.⁸⁰⁾

同じ頃の講演「私の時代」においても、彼は同様に、ロシア革命を評価しながらも、その限界に触れている。

Sie (die Russische Revolution) ist die große soziale Revolution nach der politischen von 1789 und wird wie diese ihre Spuren zurücklassen in allem menschlichen Zusammenleben. Wenn nichts anderes mir Achtung für sie geböte, so wäre es ihre unveränderliche Gegenstellung zum Faschismus italienischer oder deutscher Färbung,... Was ihr das tragische Gepräge verleiht, ist, daß sie sich eben in

76) XI, S. 163.

77) XII, S. 85.

78) X, S. 265.

79) XII, S. 94.

80) Thomas Mann: Gesammelte Werke in zwölf Bänden. S. Fischer Verlag 1960, Band X, S. 397.

Rußland vollzog und das spezifische Signum russischen Schicksals und Charakters trägt.⁸¹⁾

以上はロシア革命から30年以上を経て後のマンの見解ではあるが、いかにも真の意味での10月革命への感激の経験のないマンの言葉であることが理解されよう。彼は Brecht におけるようなマルクス主義への傾倒はなかった。彼は市民的、民主主義的、反ファシズムの立場に到達するばかりでなく、社会主義に共感を抱く立場、いや「社会主義の不可避性を承認するところまで進む」⁸²⁾が、それを越えることはなかったのである。

従って、後年のファシズムに対するマンの闘いは、左の立場から右に対して行なわれたものではなかった。1928年、イタリア・ファシスト党政権確立の年に、マンはギリシャとモスクワとの同盟を、そしてカール・マルクスがフリードリヒ・ヘルダーリンを読むことを期待し、一方的な承認は結局不毛に終ることを予想している。⁸³⁾つまりマンは「中間」の立場を堅持しているのである。この「中間」のイデーは、「考察」で論じられ、講演「ドイツ共和国について」におけるひとつの結論であったし、すでに戦前かのトニオ・クレーガーがしっかりと身につけていたものでもあった。

Und ich — ich stehe nicht einmal „gegenüber“, ich stehe auf jede Weise dazwischen, in der Mitte, — gerade darin, scheint mir zuweilen, bin ich deutsch, daß ich völlig ein Mensch der Mitte, ein mittlerer Mensch bin. Das ist keine leichte Situation, wie schon Tonio Kröger wußte.⁸⁴⁾
後年マンは、ファシズムに対する政治的態度にも、このイデーを堅持していくのである。第一次大戦後マンは「変容」した。しかしこれ以後ファシズムと闘かうマンの姿勢には第一次大戦中の姿勢と共通するものがあるのはこのためであろうか。

参 考 文 献

- Hans Eichner: Thomas Mann. Eine Einführung in sein Werk. Francke Verlag, Bern 1953.
Hans M. Wolf: Thomas Mann. A. Francke AG. Verlag, Bern 1957.
Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann. Rütten & Loening, Berlin 1959.
Martin Flinker: Thomas Manns politische Betrachtungen im Lichte der heutigen Zeit. Mouton & Co. 's-Gravenhage 1959.
Arnold Bauer: Thomas Mann. Colloquium Verlag, Berlin 1960.
Hans Bürgin u. Hans-Otto Mayer: Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1965.
Eberhard Hilscher: Thomas Mann. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1973.

81) XII, S. 594/595.

82) ルカーチ著作集 5 457 ページ

83) XI, S. 714.

84) Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955. Verlag Günther Neske Pfullingen 1960, S. 34.